寝床屋の無料配布

・お山の修行……3

夏のそよ風が梢を渡って来て、茂吉を取り巻いて去って行く。お山の奥は夏でも涼しかった。遠くを見渡せるひときわ高い木の上が茂吉のお気に入りの場所だ。

「小童(こわっぱ)」

「やい、童(わっぱ)、やい」

そんな声がしたかと思うと、大樹の太い幹の上で胡座を組んだ足に、モゾモゾと小鬼が登ってくる。そして茂吉の膝に立ち上がると、ポカン、と口を開けて茂吉を見上げた。

その顔に、小さな頃にまんじゅうを食べようとしていた自分を、まるでおなじ顔をして見上げてきた彼らの姿を思い出してしまって、思わず、ふっと笑みが溢れた。

「笑ったな」

「やい、笑ったな、やい！」

小鬼がぴょんこぴょんこと膝の上で飛び跳ねて抗議した。

「ごめん」
茂吉は掠れたような小さな声で謝ると、母が持たせてくれた握り飯を千切って小鬼たちに分けた。まだちゃんと声が出せないので、小さい声になってしまう。
「こんぶ」
一方の小鬼がむっとした顔で、もう一方の小鬼が抱えた米粒の塊を指差した。
片方に具の欠片がついてる、ついてないと言う些細なことでも厳しく文句がつく。茂吉は自分のおにぎりから昆布の佃煮を摘んで、ない、と訴えた方の米につけてやった。
それでやっと納得したのか、小鬼たちが握り飯のかけらを食べ始めた。
茂吉は、天狗のお山で修行している。
と言っても、茂吉の場合は天狗――正確には所謂神を奉じ、その知識を持って人ならざる技を使うことが出来る山人――になる修行ではない。
実は茂吉は龍王の息子である。だが、遅くに出来た子で龍の力も知識も教わる間がないまま、父親である龍王が死んだ。だけに、力を上手く使えず、龍が持つ摩尼玉(まにだま)を狙う輩たちに追われる羽目になった。摩尼珠はどんな願いをも叶えると言われている

宝物だからだ。茂吉は蛟である母の必死の教育で、辛うじて人の子供の姿に化ける術を身に付けた。そして母と逃れ逃れて人の中に潜み隠れた。

そして、人里に降りた天狗と江戸のある裏長屋で出会い、そのツテで龍の力を使えるように、修行をすることになったのだ。

そんな経緯で修業を始めて早数年。肝心の修行の方はどうかと言うと、進んでいなくはないが、急激に進む気配も見えない。掠れたような声が出るようになっただけで、龍の力などどうすれば使えるのかさっぱりわからない。一度だけ人から龍の姿に戻ったことがあるが、それきりちょいとも変わらない。

母が見つかってはならぬと念じた結果なのか、茂吉がそれを受けて自ら封じてしまったのか、山の長でもとんと見当がつかぬそうだ。改めて茂吉の状況を知った母は、己のせいだと自身を酷く責めて悲しんだ。

茂吉もそれが悲しく、改善の見られない自分を情けなく思った。

早く早くと焦る気持ちからか、母の悲しむ顔が辛いからか、茂吉はお山での修行に打ち込むようになって、ここ一年ほどは母と暮らしていた長屋にも帰っていない。昨晩は長に諭されて、本当に久しぶりに長屋に帰ったくらいだ。

茂吉は食べかけのおにぎりを手に、ふぅ、と溜息を吐いた。小鬼がそんな茂吉を見上げてくる。

「小童、腹でも痛いのか？」

「ちくちくのちくちくりんか？」

小鬼は式神である。人型の紙に呪を書きつけ、一時的に命を吹き込んだモノ。そもそもは、茂吉が修行できるように手回しをしてくれた天狗、キカイセンセイと呼ばれている男が使う式である。だが、この小鬼はなぜか茂吉をいたく気に入って、以来こうしてキカイセンセイの仕事をほっぽりだして茂吉にくっついて回っている。小鬼の意図は判らないが、今の茂吉にとっては、小鬼の存在が救いにもなっている。茂吉は指の腹で小鬼の頭を撫でた。

「やい！　子ども扱いするな！　仮にも鬼じゃぞ」

「鬼じゃ、怖い鬼じゃぞ」

式神と言うかりそめの存在でありながら、姿かたちは小さくとも、一人前の鬼であると言う意識があるらしい。またしても茂吉の膝の上で怒ってぴょんぴょんと飛び跳ねた。茂吉はもう一度、ごめん、と謝った。

「お前、よくやるなぁ。面倒臭くねぇの？」
小鬼が臍を曲げてしまったのをとりなしていると、同じ弟子の子供が別の枝からひょい、と顔を覗かせた。茂吉よりも年は下だが、先に修行を始めていたので、兄弟子である。茂吉は、うん、と小さな声で答えた。
「ふぅん。まぁ、いいや。お前に客が来ているぜ」
いっぱしの言いっぷりの兄弟子は、茂吉の正体を知ってか知らずか、それとも世話を任されたと言う使命感からか、茂吉を恐れた風もなく喋る。
「わかった」
と相変わらず掠れた声で答えて、残りの握り飯をぽい、と口に放り込んだ。小鬼たちも真似をしてぽい、と米粒を放り込んで、パンパンに膨らせた口でもぐもぐと咀嚼しながら、茂吉の懐へ潜り込んだ。
茂吉はその懐を軽く抑えながら、兄弟子の後を追って山の枝伝いに駆けた。
長がいつも座って居る木の根元に、長と向かい合うように男が一人座って居た。
「センセイ」

茂吉の掠れた呼びかけに、眠たそうな顔をした男がおお、と笑う。
「随分と陽に焼けましたね。うん、元気そうで何よりです」
キカイセンセイがそう嬉しそうに笑うのに、えへへ、と照れて、茂吉もうんと頷いた。
「長屋の皆が茂吉に会えなかったと残念がっていましたよ」
そう言われて、申し訳なく小さくなる。昨晩はそっと長屋に帰ったため、随分と世話になった長屋の住人には挨拶しなかったのだ。夜遅くに帰ったせいもあるが、誰にも彼にも修行の成果を聞かれるのが煩わしかったのもある。皆が心配してくれているのも判ってはいるのだが。
懐から小鬼がわらわらと出てきて、本来の主であるキカイセンセイを見て、「ややっ、小天狗！」と驚き慌てふためく。一応自分たちの役目を怠けているのを自覚しているらしい。
キカイセンセイはそんな小鬼たちをチラリと一瞥して、山の長に向き直る。
「師匠、いかがですか」
「いかがもなにも、そう簡単に済めばこんな山奥で修行などしておらぬよ」
修験者のような格好をして、長く真っ白な髭を蓄えた長は、そう言って笑う。

「すべては己の内から、当たり前のように湧き出づるもの。そう思えるまで気楽に構えておるほかなかろう」
そう言って、何やら意味ありげな目つきを茂吉の方へしてくる。
「この念丈岳もそうじゃ。今はこんなに澄ましておるがな、こやつも始めはてんでからきしでなぁ？　後から来た坊主の方があっという間に上達してしまいおった」
茂吉はぱちくりと瞬きして、念丈岳と呼ばれたキカイセンセイを見る。
まさか、と思う。
だが、キカイセンセイは参ったな、なんて頭を掻いてバツが悪そうに笑っていた。
「だからな、もっと鷹揚に構えていなさい。そなたが龍王であることになにも疑いはないのだから」
長はそう言って、かっかっか、と笑った。
ああ、そうか。
茂吉はなんだか力が抜けて、身体がふっと軽くなった気がした。
力の制御ができないことは、龍王ではないということではない。
だが、修行がうまくいかないことで、目の前にあることにしか意識が向いていなかっ

た。
「はい」
変わらず掠れたような声だったが、それまでよりは力の入った声が出た。
うんうん、と長が頷いた。キカイセンセイも、眠そうな目のまま顔を綻ばせ、小鬼も牙を剥いて嬉しそうに笑った。
「とは言え、お山を焼け野原にされては困るでな、修行はビシビシといくからの」
長のにこやかな声なのに、目が笑っていない言葉の迫力に、小鬼共々、茂吉の背筋が思わず伸びた。

――――了

1129# エアブー Nov.2020

寝床屋の無料配布

2020/11/29 刊
URL: http://wwbtd.mods.jp/nedocoya/
Mail: nedocoya@gmail.com
Twitter: @nedocoya4pr

ようこそお出で下さいました。
この度はお手に取っていただき有り難うございます。

今回は、江戸時代でモノノ怪のお話しです。
話の元は『仙境異聞』（岩波文庫）の天狗（山人）
から着想を得ています。
元々は『指仙人』に掲載の「キカイカイカイ」の
後日談ですが、今回のお話単独でもお楽しみ
いただけると思います。
ご興味が向きましたらば、元の方もご覧いただければ
幸いです（と宣伝してみる）。

寝床屋は、江戸時代を中心にあんまり剣豪とかが
出てこないお話を、番頭さんことかわなをと、
丁稚こと扇坊の二人で書いております。

少しでも楽しんでいただければ幸いです。

＊おねがいとおことわり＊

本書について、以下の行為はご遠慮くださいますようお願いいたします。

・有償無償を問わず、本書の内容を、ご自分の作成物として一部、または全てを再配布する行為。

・本書を有償にて再配布する行為。

本書の内容は今後の頒布物に収録される場合があります。また、その際にサイトでの掲載を取りやめる場合がございますので、予めご了承くださいませ。

本書は無料配布として作成したものです。